

# 詞玉緒の成立過程

## ——「七之卷」の草稿——

渡辺 英二

### 一 はじめに

本稿で扱う資料と範囲、目的、及び引用本文翻刻の要領は次のとおり。

### 資料

詞瓊綸 草稿本三冊、詞の玉の緒六・七（残闕）

『本居宣長記念館所蔵 重要文化財目録』二七（草稿本と略）

玉くしげ草稿本紙背（詞の玉緒稿）

『本居宣長記念館所蔵 重要文化財目録』三四（秘本紙背と略）

玉くしげ別巻草稿本紙背（詞の玉緒稿）

『本居宣長記念館所蔵 重要文化財目録』三五（別巻紙背と略）

詞瓊綸 再稿本七冊、第七冊

『本居宣長記念館所蔵 重要文化財目録』二七（再稿本と略）

刊本言葉の玉緒（文政十二己丑一年再刻）

筑摩書房『本居宣長全集』第五巻を使用（全集本と略）

### 範囲

詞玉緒七之卷「古風の部」

### 目的

草稿による「古風の部」成立過程の究明

### 引用文翻刻の要領

- 1 へ 内、書人挿入
- 2 〔 〕 内、抹消削除
- 3 【 】 内、二行割書
- 4 「 」 内、頭書・行間書入
- 5 （ ） 内、筆者（渡辺）の注記
- 6 太字・太線は朱書の意
- 7 引用文中のアルファベット、アラビア数字は記述の便宜上の印し
- 8 丁付けを欠く草稿には私に付す。例、2ウ

9 漢字は現行通用字体を使用

二 七之卷の冒頭

1 草稿本

主として本節が扱う箇所は「七之卷、古風の部」の冒頭、いわばその総論の部分。便宜、筑摩版宣長全集でいうと第五卷の二五三ページ冒頭（二五四ページ末尾の範囲）。その刊本の本文は全集本に譲つて、ここでは刊本と大きく異なる表現のない再稿本の、その前に位置すると認められる草稿本の本文を次に引用する。

草稿本の本文は抹消・書入・付箋・頭書があつて整つてはいない。

①草稿本

○古風の部

○万葉集によりて古風の歌をよむともからかなつかひ「の事」をハくはしくさたすめれとてにをはの事ハ絶てさたせさる故に「此輩の」歌「に」も文「に」もとゝのはぬことのみそおほ「き」  
〈かゝる〉 さるはかのかなつかひは定まれるのり「も」 「へにてハ」 〈「なくたゝ古き書にかけ跡によるより外のわさなくして」  
〈なけれハ〉 みつからのちからもてこゝろえわきまふること「もなけれハ」 〈ハなくしてたゝ古き書にかけ跡によるより外のわさしなけれハ〉 いたたやすきをてにをは、皆定まるとゝのひの

有てそをよくさとする時はこともなけれとそのさたまりをへわきまへくさとするこたやすからす「この」へさるく故にすへて後の世にハ大かた言のはの道心得たりと思へる人も「これをしらす」へなはたとくしくともすれハ「ウ」あやまることおほきそかし△然るに古風の歌よむともからは是をはさたすることなきハいにしへふりにハてにをはの定まり「といふ物はなしと思へるにや」へハなき事とや思ふらんく（この△は前の△のところ以後の△の部分挿入する意）△歌にまれ文にまれ此てにをはのとゝのはさるはたとへは

（二行ほど、空白）

いかにめてたくても皆いたつらことなるをやそもく此「てにをは」のとゝのひはへさらに後のよに定めたるわさにハあらずく神代の始より人のことのはにしたかひておのつから定まれる物にし「へあれハ」 「てさらに後の世に定めたるわさにへハ」あらずいにしへは心せてへふとくいひ出る言もてにをはく「へありけれハことさらに心せされ共くおのつからとゝのへりけれハ「古へハ」ことにこれをさたし学ふこともなかりしを後の世になりてやうく「オ」たかふふしあるによりてとかくさたすることも始まり又ことさらに心せすてハ明らめかたくも成ぬるなりけり然るを古へハてにをはといふ名なくさたもなかりしこと也とへい

ひて「これを」すつへきことわりあらんやは（かの）かなつかひもいにしへハおのつからわかれたる言葉のこゑにつきて定め「書」つる物にて心せぬ共おのつからたかふことハなかりし故に殊にそのさたハなかりしを後にみられたるによりてそのさたハ出来しにあらすやいて上つ代「に」へよりてにをはの定まり「ハ有ける」への正しかりける事を書くはしくはむまつ古事記と日本書紀とにのれる歌長き短き合せて百八十餘首ある皆いと神さひて「今のように」耳遠き「物なれ」詞共ハおほかれ共てにをは「ハ」「へのとへのへ」へに至りてハ古今集よりこなたのとへのへと「ウ」もはら同しくてことなることなし其中にた仁徳ノ巻なる皇后の御歌にへころもこそ二重も「え」へよき【「えきよき也」】天智ノ巻の童謡にハへあゆこそハ嶋べもえき【「えきハよき也」とある此二ツハこそとかりてきと結ひたる後の格にたかへり但し是も万葉にハ例多けれハ【下に出す】上代の一つの格と見ゆ又推古ノ巻聖徳太子の御歌にへおやなしになれなりけめやとあるハ汝親なしに成たりやといふ意なれば（後の格ならハ）へなりけんやと有へきを「んを」へけめへやとあるハ（後の格「と」「へならハ」異也但し）へ異也へたし此格万葉にハ殊に多けれハ【下に出す】これも上代の格なるへし猶後にも（一つ二つハ）「源氏物語処女ノ巻にへ日影にもしる

かりけめやをとめこか天の羽袖にかけし心は拾遺集二へ都人ねでまつらめや時鳥 10才今そ山へを鳴ていづなる「（たと）例あるをや右の三「ツ」へ首のほかハことく定まれる格の如くにていさかもたかへることな「し考へこゝろみて知へし」へけれハ【猶下に所々引てもことわれり】「然れハ」上代よりおのつから定まりあること明らけし古風をよまん人もいかでかてにをはをたさずてハ有へきその輩もとより是をさたすることなく心にかけてる故に明暮古の歌をハ見れ共此とのひあることをしらざる也次に万葉集へも廿卷四千五百餘首の中にハさまくめつらしき詞又いひさまつけさまなど「の」へハ後世とハいたく異なる「たとハ」へことのみへおほかれとてにをは「の」へのとへのへへにいたりてハもはら後世の「歌」へカクと同しくてたかへる歌ハ百に一つも見えずいとくまれ「ら」へにて「也」へなり「もはら古今集よりこなたのと」「（後の歌と）」「同しこと也」然れハ「古風を学ふともからも」10ウ「此」てにをはのとへののみはた古今集よりこなたの歌「にならひて」へをまもりて露たかふことなけれハ「今この部にも別にハあけす古風を学ふ輩も」同しく「上のくたりく」へひもかみ三転の証歌を考へて明らめ知へき也

## 2 草稿本と再稿本・刊本との異同

草稿本には挿入や抹消が入り混じっているが、今へへ内の挿入の文字が有って「」内の抹消の文字が無いものとして書き換えると、それが草稿本の最終段階の本文となつてその後位置する本文（再稿本）に近い本文となるはずである。それが再稿本と全く同じとは必ずしも言えないが、極めて近い本文であることは間違いない。それを仮に「草稿本後」と称することにする。

次に草稿本引用①の、再稿本と照合して大きな異同を含む個所を「草稿本後」の本文で挙げる（問題とする個所に前後を含めて傍線を付す）。

### ②草稿本後

さる故にすへて後の世にハ大かた言のはの道心得たりと思へる人もなほたとくしくともすれハあやまることおほきそかし 歌に  
まれ文にまれ此てにをはのとゝのはさるはたとへは（二行ほど、空白）然るに古風の歌よむともからは是をはさたすることなきハいにしへふりにハてにをはの定まりハなき事とや思ふらん いかにめてたくても皆いたつらことなるをやそもく此のとゝのひはさらに後のよに定めたるわさにハあらず 神代の始より人のことのはにしたかひておのつから定まれる物にしありけれハことさらに心せされ共おのつからとゝのへりけれハ古へハことにこれをさ

たし学ふこともなかりしを後の世になりてやうくたかふふしあるによりてとかくさたすることも始まり又ことさらに心せすてハ明らめかたくも成ぬるなりけり

右が直ちに再稿本の本文と同じでないことは次に挙げる再稿本に对照して明らかである（問題とする個所に②「草稿本後」に対応して傍線を付す）。

### ③再稿本（刊本も殆ど同じ）

さる故にすへて後の世にハ大かた言の葉の道心得たりとみつから思ひゆるせる人もなほたとくしくともすれはあやまることおほきそかし 歌にまれ詞にまれ此てにをはのとゝのはさるはたとへはつたなき手して縫たらん衣の如し その言葉ハいかにめてたき綾錦なり共ぬへるさまのあしからんハ見ぐるしからじやは 然るに古風をまねぶともからこれをハとゝのへん物とも思へらぬはいにしへふりにハてにをはの定まりハなきことゝや思ふらん そもく此とゝのひはさらに後の世に定めたる物にハあらず 神代のはしめより人の言の葉にしたかひておのつから定まれるものにし有けれハことさらに心せされ共おのつからよくとゝのへりければいにしへはことにこれをさだしまなぶこともなかりしを後の世になりてやうくことばいやしくみやびごとハ物うとくなるまゝにたがふふしもあるによりてとかくさだすることもはじまりしをま

ことに今ハことさらに尋ねもとめざれば明らめえかたくなん成にける

### 3 時枝誠記の詞辞の譬え

右の②草稿本後と③再稿本の異同で注目される個所は、再稿本の、

④つたなき手して縫たらん衣の如しその言葉ハいかにめてたき

綾錦なり共ぬへるさまのあしからんハ見ぐるしからじやは

に対応する草稿本で二行ほどの空白になっている部分である。草稿本が空白ということは、④は草稿本の後、再稿本に至る段階で、即ち「詞玉緒」成立のおそらく最終段階で、加えられた譬えということになる。

そしてこの譬えが注目されるのは、時枝誠記が詞辞の別を譬えて、

⑤(宣長は)表現全体を人間に譬え、詞に属するものを布である

とし、辞に属するものを、布を縫ふ手或は技術に譬えてゐる。

或は、詞を玉にたとえ、辞を、玉を貫く緒にたとへたりしてゐる。玉とこれを貫く緒によつて、裝飾品が出来るのである。<sup>1)</sup>

といい、これに注を与えて『詞の玉緒』総論(五六頁)とする、この前半に類似しているからである。

しかし時枝の注がいう「詞の玉緒総論」とは詞玉緒のどこを指すのか、「総論」とはどこか、となると必ずしも明確ではない。「総論」が「一之巻」を指すのであれば、そこには右に引用した⑤にい

う「人、布、縫ふ手、技術、玉、貫く、緒、裝飾品」に連なるような、それを直ちに連想させるような表現は存在しない。他にあるとすれば宣長自序であろうか。「言葉の玉のをの序」には次のようにいう。

⑥此ふみの名よ。玉の緒としもつけけるよしは。人の身のよそひにも。万の物のかざりにも。あがりし世には。高きいやしきほどく。みな玉をなむものして。いみしきたからのおやとはしければ。何事のうへにも。みじかし長し。たゆみだるなどいはむとてのたづきにも。まづそれがをを引かけ。うつせみのよの命さへなん。たとへていひける。さるはいとかざりなくめでたき物のかざりならむにも。ぬきつらねたらんさまにしたがひてなむ。いま一きはの光もそはりぬべく。またはえなくきえても見えぬべければ。此緒こそげにいとなのめなるまじき物には有けれ。ましてすぢなくみだれもし。絶もしなむには。いかにめでたく共。そのかざりいたづらならじやは。ことの葉の玉のよそひはた。此ぬきつらぬるてにをはからなん。ともかくもあしめるわざなれば。又よそへてなむ。(刊本・全集八頁)

これは、意を汲めば詞と辞の違いを述べるに⑤のように表現し得ないことはない。時枝は「玉のをの序」をもって⑤としたのかも知れないが、今問題にしている「七之巻」の④は少なくとも⑤と直截

的な関係がある。今その当否は問わないとしても、てにをはの特性を譬える④が草稿本の段階でその当初から「……たとへば」といながらそこに無いということは、譬えが未だ全く思い付かなかったということか、何か譬えが既にあつたが意に染まず削除し変更を考慮中であつたということか。この点については、草稿本の前に位置する「玉くしげ草稿本紙背の詞玉緒稿（秘本紙背）」に当たってみる要がある。

#### 4 玉くしげ草稿本紙背玉緒稿（秘本紙背）と草稿本

草稿本の前にある草稿で、今問題にしている部分、即ち七之巻冒頭の草稿は「玉くしげ別巻草稿本紙背（詞の玉緒稿）」（別巻紙背）には無く、「玉くしげ草稿本紙背（詞の玉緒稿）」（秘本紙背）が現在残されている初期の唯一の草稿である。これが玉緒執筆の最初の草稿か否かは不明だが、かなり初期の草稿であることは疑いない。初期の表現を知るためにも今問題として個所を含む前後を合せ、かなり長くなるが次に挙げる。

#### ⑦秘本紙背

㊦㊧㊨ 「世の人」てにをははたゝ歌「にのみ定まれる格ハ有事にて」

〈のうへのことくのみ心得て〉たゝの詞にハ定まれる〔格も〕

〈とゝのへなとも〉なき〔事〕「へわさゝ」へものゝとへや

思ふ〔にや〕 へらん 後世人のかける文章を見るに〔てに

をハの〕〈皆〉かなハぬ事〔いと〕〈のみそ〉おほ〔し〕

〈かる〉そもく〈此〉てにをはハ〔神代の始より人の言語に附ておのつから定まれる物にして〕歌のみならずたゝの詞にもへもとよりみな〔其格〕へさたまり有〔事〕也故

〈にて〉古人のへは〔かける〕「へは」文にハたゝかり

そめ〔に〕「へなる」へにたゝひとくたり二くたり書る

物へ迄も〔てにをはの〕たかへるハへさらになしおの

つからのことなるかゆゑ也其〔格ハ全く〕へさだまりハも

はら歌へのてにをはと一ツにて中間の詞の〔長短〕へみ

しかき長きけちめこそあれ上下の〔てにをは〕へとゝのへ

はいさゝかも〔かハる〕へことなることなし△「△」イ

ツクニテモへイカナル所ニマレ詞ノ切ル、所ハ必〔歌ノ

テニヲハノ格と全ク同シ事也〕へ上ノテニヲハヲ守リテリ

ト「イヒルト云タグヒカリソメノ文モミタリニカクヘキニ

アラス」へルルトル、又ツトツルヌトヌル〔ルトル、ナ

ト〕へナトノノタクヒケチメニ〔紐鏡ニテ心得ワクヘシ〕

へ心ヲツケテ〕〔猶文章のてにをはの事ハおくに別に委く

記せり〕へへカリソメノ詞ヲモミタリニ書ヘキニアラス〕

10オ

㊦㊧㊨〇「近き比」万葉集〔の〕へによりて古風の歌をよむ〔人

おほく出きたりその」ともから「つねに」かなつかひの事をハくはしくさたすめれとてにをはのことハたえてさたせ「す」△「△さる故に此輩の歌にも文にもとゝのはぬことのみそいとおほきかの」「〈抑〉」かなつかひハ定まれる格といふこともなくたゝ古書にかける例「のまゝにかく」〈による〉より外の「こと」〈わさ〉なくしてみつからの力「に」〈も〉て心得わかまふる「こと」〈ことし〉なければいとたやす「し」〈きを〉てにをはゝ「皆」定まれる格〈の〉有てそをよくさとする時はこともなければ共その格をさとする事たやすからすこの故に〈すへて〉後世「ハ」〈にハ〉「ハ人は」大氏オホカミ「歌よくよむ」〈言の葉の道心得たりと〉〈と思へる〉人もてにをはをしらすともすれハ「かなハぬ」〈あやまる〉ことおほ「し」〈きそかし〉然るに古風の歌よ「みのたゝかなをのみさたして」〈むともから〉是を 10ウ「(次行からの頭書 a を挟んで「ハさたすることなきハ古風……」に続く)

「(a)「皆」〈もはら〉古今集よりこなたの「言のとゝのひ」〈ひ〉と「もはら」同じ事也 然れハ古風「のてにをはにて(四五字不明)〈ヲマナフトモカラモテニヲハを〉たゝ古今集よりこなたの歌「ノとゝのへ」にならひて露たか

ふことなければ今「こと」〈此部〉に〈も〉別にハあけす「古風ノテニヲハモ同シク」上のくたりく 10ウ」を考へて明ら「む」〈めしる〉へきなり」

ハさたすることなきハ古風イニシヘフリ「の歌」にハてにをはの格といふ物ハなきことく思へる「なるへしされハこそ此輩の歌にも文にもてにをはのかなハぬこと〈のみ〉いとおふけれ」〈にや〉歌にまれ文にまれ「いかにめてたくても」此てにをはのとゝのはさるハたとへは礎をかためすして柱を立たる屋のことく「漢文にもじの転倒ある」かことくにて「いかにめてたくても」みないたつらこと「也」〈なるをや〉そもく此てにをは「の格」〈のとゝのひ〉ハ神代の始より人の言語コトノハにしたかひておのつから定まれる物にしてさらに後の世に定めたるわさにあらず 古ハハ「これに心とゝめす何となく」〈心せて〉いひ出る言もてにをはハおのつからとゝのへ「る故に」〈りけれハことに〉これをさ 11オ」たし「て」学ぶこともなかりしを後世になりてやうくたかふこと有に「つき」〈より〉て〈とかく〉さたすることも始まりし也〈けり〉然るを古ハハてにをはといふ名なくさた〈も〉なかりしことなりとて是を用ふましき理あらんやハかなつかひも古ハハおのつからわかれたる「人」〈言葉〉の音につきて定め書たる

物にて心せねともおのつからたかふことハなかりし故にことにそのさたハなかりしを後にみられたるによりて其きたハ出来しにあらすや〔是も古へさだなかりしことゝてすつへき物にハ〕いて上代よりてにをはの定ま〔れる格〕へり有し事

〔記歌〕をくはしくいはんまつ古事記と日本紀とにのれる歌〔長き短き〕合せて百廿ウ八十余首ある〔中に〕へみな〔後世〕

いと〔(二字不明)〕神さひて耳とほきものなれともてにをハ、古今集よりこなたの〔てにをはの〕と、のへともはら〔同じこと也その中に〕ことなることなし〔其中にたゝ〕

推古卷聖徳太子の御歌にへおやなしになれなりけめやとあるハ汝チ親なしになりたりやといふ意なればへなりけんやと有へき格なる〔を〕へにへんをめとあるハ後の格と異也但し万葉にへもへんといふへき所をめといへるハ例これかれあれハ〔下に出す〕上代の格なるへし△□△なほ後にも源氏

処女ニへ日影にもしるかりけめやをとめ子か天の羽袖にかけし心は拾遺二へ都人ネデマツラメヤ時鳥イマツ山へ

〔ケレ〕ヲナキテイツナルナド例アルヲヤ〔又仁徳卷皇后の御歌に

〔ケル〕へころもこそ二重もよき天智卷の童謡にへあゆこそハし

まべも〔よ〕へえへき【えきハよき也】とあ〔り〕へる此二ツへハこそといひてきと結ひたる〔へ(二字ほど不明)〕

〔し〕後の格にたかへり但し〔此格〕へこれも万葉に例多

〔し〕へけれハ下に出す〔然れハ〕上代の一へッノ

格と見えたり右〔三は〕への三ツの外ハことゝく定ま

れる格のことくにていさゝかもたかへ12オることなし

〔へその定まれる格ハ古今集以来の歌のてにをはと全く同じ

こと也〕〔考へ心見て知へし猶下所々に引てことわれり〕

然れハ上代より〔其格〕おのつから定まりあること明らかし

古風をよまん人もいかてかてにをはを心得ずてハ有へき其

ともがらもとより是をさたすることなく心にかけたる故に

〔明暮〕古歌をハ見れ共〔格〕へ〔此(四字ほど不明)〕此

〔万葉集とへの〕あることをしらする也次に万葉集廿卷歌数四千

五百余首の中にへにハさまゝめつらしき詞又〔後世と異な

る詞つかひの格〕へイヒサマツ、ケサマナトノ後世トイタク

コトナルへなどハおほけれとてにをはのたかへる歌〔わつ

かに廿六首ならてハなし〕へはいとゝまれ也そハ十一ノ

卷【二十丁】に〔へ十二ノ十丁ヲへうらふれてかれにし袖を

又まかハ過にし恋〕みたれこむ〔かも〕

疑

めつらしき君を見んと〔そ〕左手の弓とる方のまゆねかき

つれ

此つれハ礼と書りもしハ類ノ字を誤れるにや六帖にハ二の句をへ君見んとこそと直して入たり12ウ」(以下、略)

右に見たように秘本紙背も抹消・書入・頭書が複雑に入り混じって夥しい加筆が行われており、初めに玉緒七之卷「文章の部」のいわば総論(全集二九八頁)に当る文ノテニヲハがあり、次に古風テニヲハ(全集二五三頁)が続く。全体の構成は草稿本(再稿本・刊本)のそれと異なり順序は逆であるが、文章のてにをはとともに古風のてにをはを説く論述の骨格は既に形をなしている。

#### 5 草稿本初と秘本紙背後と秘本紙背初

秘本紙背についても草稿本と同様、抹消・書入・頭書を整理し、最も草稿本に近い本文として「秘本紙背後」と秘本紙背の最も初めの本文として「秘本紙背初」を復元し、更に秘本紙背後の次に位置する本文として「草稿本初」を復元して、②③で指摘した今問題の傍線部に関係する箇所を次に挙げる。

#### ⑧ 草稿本初

この故にすへて後の世にハ大かた言のはの道心得たりと思へる人もこれをしらすともすれハあやまることおほきそかし然るに古風の歌よむともからはをはさたすることなきハいにしへふりにハてにをはの定まりといふ物はなしと思へるにや歌にまれ文にまれ此てにをはのと、のはさるはたとへは

(二行ほど、空白)

いかにてたくても皆いたつらことなるをやそもく此てにをはのと、のひは神代の始より人のことのはにしたかひておのつから定まれる物にしてさらに後の世に定めたるわさにあらずいにしへは心せていひ出る言もてにをは、おのつからと、のへりけれハことにこれをさたし学ふこともなかりしを後の世になりてやうくたかふふしあるによりてとかくさたすることも始まり又ことさらに心せすてハ明らめかたくも成ぬるなりけり

#### ⑨ 秘本紙背後

この故にすへて後世にハ大氏言の葉の道心得たりと思へる人もてにをはをしらすともすれハあやまることおほきそかし然るに古風の歌よむともからはを(「ハさたすることなきハ古風……」に続く)

「もはら古今集よりこなたのと同じ事也然れハ古風ヲマナフトモカラモテニヲハをた、古今集よりこなたの歌にならひて露たかふことなけれハ今此部にも別にハあけす古風ノテニヲハモ同シク上のくたりくを考へて明らめしるへきなり」(⑦秘本紙背でaとしたこれは、この位置に落ち着く加筆ではない。↓三 七之卷の構成ハさたすることなきハ古風にハてにをはの格といふ物ハなきこと思へるにや歌にまれ文にまれ此てにをはのと、のはさるはたと

とへは礎をかためずして柱を立たる屋のことくかことくにていか  
にめてたくてもみないたつらことなるをや そもく此てにをは  
のとゝのひハ神代の始より人の言語にしたかひておのつから定ま  
れる物にしてさらに後の世に定めたるわさにあらず 古へハ心せ  
ていひ出る言もてにをはハおのつからとゝのへりけれハことにこ  
れをさたし学ふこともなかりしを後世になりてやうくたかふこ  
と有によりてとかくさたすることも始まりし也けり

#### ⑩秘本紙背初

この故に後世ハ大氏歌よくよむ人もてにをはをしらす ともすれ  
ハかなハぬことおほし 然るに古風の歌よみのたゝかなをのみさ  
たして是をハさたすることなきハ古風の歌にハてにをはの格とい  
ふ物ハなきことく思へるなるへし されハこそ此輩の歌にも文に  
もてにをはのかなハぬこといとおふけれ 歌にまれ文にまれいか  
にめてたくても此てにをはのとゝのはさるハたとへは礎をかため  
ずして柱を立たる屋のことく漢文にもじの転倒あるかことくにて  
みないたつらこと也 そもく此てにをはの格ハ神代の始より人  
の言語にしたかひておのつから定まれる物にしてさらに後の世に  
定めたるわさにあらず 古へハこれに心とゝめす何となくいひ出  
る言もてにをはハおのつからとゝのへる故にこれをさたして学ふ  
こともなかりしを後世になりてやうくたかふこと有につきてさ

たすることも始まりし也

6 詞辞の譬え、その推移

問題としてきた傍線部がどのような過程を経て刊本に至ったか。

煩瑣ながら改めて最も初期の草稿から順に列举すると、

1 歌にまれ文にまれいかにめてたくても此てにをはのとゝのはさ

るハたとへは礎をかためずして柱を立たる屋のことく漢文にも

じの転倒あるかことくにてみないたつらこと也 (⑩秘本紙背初)

2 歌にまれ文にまれ此てにをはのとゝのはさるハたとへは礎をか

ためずして柱を立たる屋のことくかことくにていかにめてたく

てもみないたつらことなるをや (⑨秘本紙背後)

3 歌にまれ文にまれ此てにをはのとゝのはさるハたとへは (二行

ほど空白) いかにめてたくても皆いたつらことなるをや (⑧草

稿本初)

4 歌にまれ文にまれ此てにをはのとゝのはさるハたとへは (二行

ほど、空白) 然るに古風の歌よむともからは是をさたすること

なきハいにしへふりにハてにをはの定まりハなき事と思ふら

んいかにめてたくても皆いたつらことなるをや (②草稿本後)

5 歌にまれ詞にまれ此てにをはのとゝのはさるハたとへはつたな

き手して縫たらん衣の如し その言葉ハいかにめてたき綾錦な

り共ぬへるさまのあしからんハ見ぐるしからじやは 然るに古

風をまねぶともからこれをハとゝのへん物とも思へらぬはいにしへぶりにハてにをはの定まりハなきことゝや思ふらん(③再稿本)

6歌にまれ詞にまれ。此てにをはのとゝのはざるは。たとへば。

つたなき手して。縫たらん衣のごとし。その言葉はいかにめでたき綾錦なり共。ぬへるさまのあしからんは。見ぐるしからじやは。然るを古風をまねぶともがら。これをばとゝのへむ物とも思へらぬは。いにしへぶりに。てにをはの定まりはなきこととや思ふらむ。(刊本・全集二五三六)

となる。即ち最初の、礎をかためずして柱を立たる屋のことく漢文にもじの転倒あるかことく

が、「漢文にもじの転倒ある」を除いて、

礎をかためずして柱を立たる屋のことく

となり、全く違ふ譬え、

つたなき手して縫たらん衣の如し

に替って落ち着く。これが、後に意を採って『日本文法 口語篇』の文言となったと思われる。

現在、しばしば詞と辞の相違の比喩として引用される宣長の言葉は、玉緒に限っていえば、その成立のかなり後の殆ど完成稿(再稿

本)の段階で加えられたものであった。

### 三 七之巻の構成

#### 1 秘本紙背の頭書

秘本紙背(⑦⑨)の頭書a

⑩〔皆〕へもはらゝ古今集よりこなたの〔言のとゝの〕〔ひ〕へへと〔もはら〕同し事也然れハ古風〔のてにをはにて(数文字不明)〕へヲマナフトモカラモチニヲハを〕たゝ古今集よりこなたの歌〔ノとゝのへ〕にならひて露たかふことなけれハ今〔こと〕へ此部〕にへも〕別にハあけす へ古風ノテニヲハモ同シク〕上のくたりくを考へて明ら〔む〕へめしる〕へきなり(秘本紙背)

は、秘本紙背後(⑨)のあの位置に挿入される加筆でないことは前後の文脈から明らかである。玉緒草稿の頭書は文中の、それが挿入される個所に印しを付け欄外頭書にもその冒頭に同じ印しを付して挿入の句・文と挿入個所とが同じ印しをもって対応しているのが常である。ところが頭書aにはそれが無い。特定の個所に挿入される頭書ではないということである。となれば、秘本紙背以後の草稿本、再稿本(刊本)において頭書aがどのように生かされているかが問題となる。

挿入・抹消があつて煩わしいが、草稿本において右の⑩に類似する表現を探してみると、引用①の末尾五行ほどが相当すると考えてよさそうである。次の部分である。

⑫「もはら古今集よりこなたのと」〔後の歌と〕〔同じこと也〕然れハ「古風を学ふともからも」〔此〕てにをハのと、のへのみはたゝ古今集よりこなたの歌「にならひて」〔をまもりて〕露たかふことなけれハ「今この部にも別にハあけす古風を学ふ輩も」同じく「上のくたりく」〔ひもかゝみ三転の証歌を〕を考へて明らめ知へき也

これが最終稿とも言うべき再稿本では、

⑬しかれハ此てにをはのと、のへのみはたゝ古今集よりこなたのをまもりて露たかふことなけれハ今此部に古へのと、のへとてハ別にあげず古風をよまむ輩も同じく紐鏡三轉の証歌をよく考へて明らめ知へき也

となる。

秘本紙背の場合、古風にてにをはの総論の部分、より正しくは刊本（草稿本以降）の「古風の部」冒頭の部分に、始まりはあるが終りの文言がなく、⑦の終わりに近く「明暮」古歌を見れ共「格へ」（四字ほど不明）「此と、のへ」あることをしらする也」とあつて、続けて欄外に見出し「万葉集」を施し、

次に万葉集廿卷歌数四千五百余首の中にへにハさまくめつらしき詞又「後世と異なる詞つかひの格」〔イヒサマツ、ケサマナトノ後世トイタクコトナル〕などハおほけれとてにをはのたかへる歌「わつかに廿六首ならてハなし」〔はいとくまれ也〕そハ十一ノ卷【二十丁】に〔十二ノ十丁ヲへうらふれてかれにし袖を又まかハ過にし恋〕〔みたれこむ〕〔かも〕〔……〕〔⑦〕

として、一連の流れの中で証歌を挙げ古風にてにをはを具体的に説くようになる。これでは、結びのない総論である。

いま問題とする頭書 a (⑩) は、頭書の書く場所としてはいささか離れているが、新たに「この部」も加筆されていて古風にてにをはのまとめとして十分である。補足すべき場所に頭書 a を補うことによつて全体の構成意識が明瞭になる。

2 刊本・草稿本・秘本紙背の分類構成

七之巻の分類・構成は、刊本では文中の見出しによると次のようである（下位項目、省略）。

(1) 刊本

古風の部

○万葉集の中でにをはたがへる歌

○同集の中でにをは違へるに似て違へるにあらざる歌

○長歌の一つの格の詞

○同集てにをはの訓を誤れる歌

○古風の辞

も ぞ の や か し な ゑ い

くさぐのやすめ辞 ばを略く格 られるを略く格

るに通ふゆ れに通ふえ よに似たるを みに通ふかり

ずに通ふに ねば ずば ずけり からの意のけん

こそ こそすな こそぬかも がね がに さね そね

もの して しく ほり く らく まく

文章の部

古今集序

同集歌のはし書

土左日記

伊勢物語

源氏物語

(2)草稿本

草稿本では、分類・構成・見出し項目が整理され再稿本・刊本と

殆ど同じで、次のように配列される(下位項目、省略)。

○古風の部

○万葉集〔に〕への中てにをはの違へる歌

○同集てにをは違へるに似て違へるにあらざる歌

○長歌の一格の詞

○〔訓を誤りて〕〈同集〉てにをはの〔違へる〕〈訓を誤れる〉

歌

○古風の辞

も んの意のも か かも ぞに通ふか やに通ふか

(料紙欠落)

るに通ふゆ れに通ふえ よに似たるを みに通ふかり

ずに通ふに ねば

(料紙欠落)

土左日記

伊勢物語

源氏物語

右によって草稿本は決定稿に近い分類・構成に至っていたことが  
確認されるが、問題は秘本紙背である。

(3)秘本紙背

秘本紙背は三つに分かれる。丁数にして十四丁。次に見出しを列  
記する(抹消された見出しは除く)。

はや	1オ	ぞも	1オ
もぞ	1ウ	ぞ	1ウ
の	2オ	もの	2オ
して	2ウ	こそ	3オ
がね	3ウ	こそすな	3オ
がに	3ウ	ずけり	4ウ
ずバ	4ウ	ねば	4ウ
あらずバ	4ウ	ずけん	4ウ
けまし	6ウ	ほりト留ル	7オ
けまく	6ウ		7オ
クト留ル	7ウ	ロ	8オ
		ラ(上欄外)	8オ

イ タ カ (上欄外) 8ウ

見出しなし (そのや何の結び つる ぬる る について)

9オ〜9ウ

見出しなし (長歌のてにはについて)

9ウ

文ノテニヲハ (上欄外、以下同)

10オ

古風テニヲハ 二記歌

11ウ

め (同) ぎケルぎケレ

12オ

万葉集 12ウ

つるツレ (引用⑦はここまで)

12ウ

△ヤ △カモ や ゆユル

13オ

ぬヌル △つるツ

13オ

くるク けるケリ

13ウ

かも △くるク

14オ

ラメ れ 14ウ

右が三つに分かれるとは、第一が1オから8ウ、第二が9オから

9ウ、第三が10オから14ウまで。第一の部分は、刊本では必ずしも

連続してはいないし刊本の順でもないが、二六七頁〜二九七頁の

「古風の辞」の範囲に相当する。第二の部分は、これは全く違って

いて「一之巻」の全集本一九頁の内容に相当する。第三の部分は、

最初の「文ノテニヲハ」を除けば、全集本二五三頁から二五九頁ま

で、刊本の「古風の部」のいわゆる総論と「万葉集の中でにをはた

がへる歌」「同集の中でにをは違へるに似て違へるにあらざる歌」

に相当する部分である。秘本紙背としては草稿本以降にいう「古風

の辞」の直前までの範囲と言ってよい。結局秘本紙背は第二の部分

を除いて、刊本に比して不十分ながら第三と第一とで「古風の部」

全体を説くものとなる。そこでは多くが、証歌を列挙し簡略な説明

を施し欄外に頭書として見出しを加えるという、この草稿の書き初

めは未だ分類が十分ではなかった。

なお第三の部分になくて第一の部分にある特徴を指摘すると、第

一の部分には例えば、見出し ハやに「ヤノ部ニ書ヘシ」とか、ぞも

に「モノ部ニ書ベシ」と書きながらそれを消し「ノ部」と書き

直したりすることがあるが、刊本では確かにその通りになる。

秘本紙背をこのように考えると、もう一つはかなり初期の草稿と

考えられる玉くしげ別巻草稿本紙背の詞玉緒稿、本稿で言う「別巻

紙背」について述べる要がある。

3 玉くしげ別巻草稿本紙背の詞玉緒稿 (別巻紙背)

別巻紙背と称する玉緒の草稿は丁数にして六丁。すべてをここに

引用するのはいささか長い。後半は簡略に紹介する。

4 オには、「万葉格【後世までもあるてにをはハ略して出さず

後世にへハ】絶てめつらしきことのみをしるせり」と大きく見出

しを付け、4オにも、5ウに「んノ意のも」、6オに「か」か「かも」と「てにをは」によってまとめ、それぞれに多くの証歌を配置し列挙し、欄外に「ハも」コ、ニ書ヘシ下ニアリ」「モヨコ、ニ書ヘシ下ニアリ」「かもカノ部」「ぞもゾノ部」「メヤモ」ヤノ部ニ書ヘシ」「ソカ」ランカ」「ロカモ」「コセヌカモ」コスナノ下ニ書ヘシ」「ヌカ」などと書入れて、一応の分類があり、内部に列記されていた「も」や「か」の証歌をより詳細に類別する指示がある。

右の後半に対していささか様相の異なる前半1オ〜3ウは次に翻字とする(適宜中略)。なお、記述の便宜のため頭書の位置をA B C Dで示し、後で説明を加える個所に(a) (b)を付す。

⑭別巻紙背(前半)

□ 七。【十八ノ廿一丁】 こそ秋逢見しまゝにけふみれハおも「や」めつらし。都かたひと

此やハ弥イの意と聞ゆ よしさらす共疑のや。にあらねハてにをはの格にかゝハらす

七。へ。十四ノ廿三丁 ひるとけハとけなへ紐のわかせなにあひよるとかもよるとけやする。

□ 七。【廿ノ四十二丁】 あらしをのいをさたハさみむかひたちかなるましつつみ出てとあがくる。

(中略)

是ハ東歌にてそを。といへり故にぞ。の格の結び也右

□ △+ の歌共てにをはたかへるに似たれとみなしからす△△

〔さて〕 「へすへて」 集中てにはの字を畧へし

〔き〕 てか「さる」 へける 歌おほし 【或ハ上を

畧し或は下を畧し或は上下共に畧〔す〕 へせる有こ

れらハ 畧せる」ハ證〔になり〕 へとし かつ〔き

故に〕 へけれハすへて 論することなし へ但し へ

さて 今ノ本すへての訓ハ誤りいとおほかれ共 へそ

の へてにをはの字を へその 畧〔し〕 へき へて書

る 処〔を〕 へへに へを へそへてよめる へハ へもて

にをハにハ 大方誤りくすく へなし 十六【廿四丁】に

へばら門の 1オ 作れる小田をはむからすまなぶた

はれてはたほこに居。この居ノ字今ノ人ならハを。と

こそ訓ムへきにをりと訓るハ中昔迄もてにをはの格ハ

みたれさりし故也 是ハ上にそ。や等の辞なけれハ必を

りと留る格也 へハノ十八ウ へおほよそ へ皆 へ此

たくひにて へよみそへたる へてにをはの訓も誤りを

さく へなしまれ へに誤れる へハ へを へ左にし

るす

□ 〇 【十五ノ廿五丁】 紅葉の散なん山にやとりぬる君を

まつらん人<sup>ノ</sup>之かなしも

此之ノ字<sup>〇</sup>のと訓るハ誤也<sup>〇</sup>のといふへき処にあらすそのうへ結びものなれハかなしきといふ格也これハ人しかなしもと訓へし

□ 〇【十六ノ廿二丁】ぬは玉のひたの大黒みることにこせの小黒<sup>ガ</sup>之おもほゆるかも此之<sup>〇</sup>もがと訓るハたかへりしと訓へし「1ウ」

頭書A—十三ノ九ウ 吾<sup>ワレハ</sup>者<sup>コトアケス</sup>事<sup>コトアケソ</sup>上<sup>ア</sup>為<sup>スル</sup> ナヲ辞<sup>コトアケソ</sup>挙<sup>ア</sup>叙<sup>ア</sup>吾<sup>ア</sup>為<sup>スル</sup> コノニツ<sup>〇</sup>ノ訓<sup>〇</sup>ノスト<sup>〇</sup>スト<sup>〇</sup>分<sup>〇</sup>レタル  
宜シ

〇十九ノ廿四ヲ ハアメツチノ神ハナ  
カレヤワカツマ<sup>ハナル</sup>離<sup>ハナル</sup>流<sup>ハナル</sup>——

頭書B—七ノ四十丁 殊<sup>サケナ</sup>放<sup>サケナ</sup>者<sup>サケナ</sup>奥<sup>サケナ</sup>從<sup>サケナ</sup>酒<sup>サケナ</sup>嘗<sup>サケナ</sup> サケナ  
ムト訓へシ

九ノ廿二丁 益<sup>マスラ</sup>荒<sup>ヲ</sup>夫<sup>ヲ</sup>乃<sup>ノ</sup>去<sup>ユキ</sup>能<sup>ノ</sup>進<sup>ス</sup>尔<sup>ス</sup>此<sup>ニ</sup>間<sup>ニ</sup>偃<sup>フ</sup>  
有<sup>タリ</sup>ノコヤセル<sup>ツトヘリ</sup> フシタルト訓へシ  
十ノ十二ヲ 集<sup>ツトヘリ</sup>有<sup>ツトヘリ</sup>「1ウ」

(中略)

C 九 ①又<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>バ<sup>〇</sup>とい<sup>〇</sup>ふ<sup>〇</sup>へ<sup>〇</sup>き<sup>〇</sup>所<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>れ<sup>〇</sup>とい<sup>〇</sup>ひ<sup>〇</sup>て<sup>〇</sup>ば<sup>〇</sup>を<sup>〇</sup>畧<sup>〇</sup>ける例集  
中に卷一【廿二丁】長歌ニハ玉藻なすうかべながせれ

卷二【廿丁】ハあまつたふ入日さしぬれ【三十四丁】

ハ大雪のみたれてきたれ【一云あられなすそちよりくれば】卷三【五十四丁】ハ夕闇とかくりましぬれ

【五十八丁】ハ久方のあめしらしぬれ 卷五【五丁】  
ハうちなひきこやしぬれ【九丁】ハとゝみかね過しやりつれ(割書抹消二字不明)【四十丁】ハ玉きハる命たえぬれ 第十七【廿七丁】ハいたつらにすくしやりつれ【四十六丁】ハかへりきて「2オ」

頭書C—れレバ (おそらく見出し。この見出しは秘本紙背の第三の部分に類似している)「2オ」

(中略)

しはふれつぐれ 第十八【廿丁】ハこかねありとまうし給へれ【二十七丁】ハかしくこものこし給へれ 第十九【十三丁】ハかたりつきなからへきたれ【二十七丁】ハ露霜の過ましにけれ【第廿【三十七丁】ハをしみ】これらみな上にこそといはすしてぬれつれなといへり「又」古事記八千予神の御歌にハよばひにありかよハせ 万葉卷五【三十一丁】ハとほきさかひにつかハされまかりいませ 卷廿【三十七丁】ハを

しみつゝかなしびいませ。これらのせも同じ格にて  
へかよはせばへいませばといふ意也

さて右の歌共ハみな長歌のなからにある例なるに卷  
三【五十七丁】へいへさかりいますわきもとゝみか  
ね山がくりつれ。たましひもなし。此つれも同じ格也。短  
歌にハこれこそのみ也。2ウ」

(a) △集中かをやの格における歌多し故にか。〈又かも共〉  
といひてやの結ひなるかおほき也。かといひて切れたる  
如く聞ゆる歌も猶其留り迄かゝりてやの留りなるへも  
多し。廿【五十九丁】に△へ恨めしく君ハもある。か  
宿の梅の散過る迄見しめす有ける。此類也。「△三ノ  
十九丁ウ。四ノ四十八ヲ。六ノ四十二ヲ。七ノ四十  
二ヲ。八ノ世三ウ。四十二ウ。九ノ十二ヲ。十ノ五  
十七ウ」(この書入は頭書Dにより「△へ恨めしく……」  
の△の位置に繰上がる) 3オ」

頭書D—△印下二書ヘシ

(b) 是「ハてにをはのとゝのひにハ(かゝ)へあつ」から  
ぬ辞なれ共。「古風」古今集よりこなたの歌にハ耳な  
れぬ「ふるめかしき」辞又「同じき辞も」いひさまつゝ  
けさまへたとの古風なるなどを大かたにへぬきいてゝ

へあつめしるせりされと此辞共もてにをはのとゝの  
ひに至りてハ常の定まりにいさゝかもことなることな  
き物そ3ウ」

#### 4 別巻紙背の構成

別巻紙背引用⑭の欄外にある朱書七・十・九は、証歌をもって刊  
本と照合すると「七」は全集本の凡そ二六一ページに、「十」は二  
六三ページに、「九」は二六二ページに対応する。この朱書は初め  
に書いた順を変更して「七↓九↓十」の順に配置する指示である。  
これを草稿本以降の内容、特に証歌をもって対照すると、七は「同  
集の中でにをは違へるに似て違へるにあらざる歌」の後半にやがて  
成長する草稿、九は「長歌の一格の詞」、十は「同集てにをはの訓  
を誤れる歌」に成長する初期の草稿ということになる。ただ「八」  
を欠く点に納得できないものがあるが、今はない草稿が他にあった  
可能性はある。

末尾に近い(a)「△集中かをやの格における歌多し故にかへ又か  
も共」といひてやの結ひなるかおほき也。かといひて切れたる如く  
聞ゆる歌も猶其留り迄かゝりてやの留りなるへも多し」を一例と  
すると、これはこの文脈ではそれなりの位置を占めるが、完成稿  
(刊本)と照合すれば、直前の2ウ末までは「長歌の一つの格の詞」  
(全集二六三頁)の一部であり、直後は証歌「恨めしく……」によつ

て「同集の中てにをは違へるに似て違へるにあらざる歌」(全集二五九頁)の一部であつて(a)の存在はない。(a)は「か」と「や」の結びの問題点を説く点で「か」の部に一括され「やに通ふか」として項を改める(全集二七七頁)。

#### 5 別巻紙背と秘本紙背の関係

別巻紙背の朱書「七」が「同集の中てにをは違へるに似て違へるにあらざる歌」の後半に相当することが意味するように別巻紙背は何かの分類の初めからではなく途中から始まっている草稿で、証歌から推測すると恐らく「か」によって括られている部分であろう。そしてその証歌においては秘本紙背と別巻紙背とで位置の移動する証歌はあつても重複する証歌はない。となると別巻紙背の前半は秘本紙背の欠を補い秘本紙背と合して一連の草稿、即ち秘本紙背と別巻紙背合せて一本となつてやがて草稿本に至る草稿かと思われる。その点で注目されるのは別巻紙背(⑭)末尾の部分(b)である。改めて引用すると、

⑮是(ハてにをはのと、のひにハ「か」)〈あつ〉からぬ辞なれ共「古風」古今集よりこなたの歌にハ耳なれぬ「ふるめかしき」辞又〈同じき辞も〉いひさまつ、けさま〈など〉の古風なるなどを大かたにへぬきいて、あつめしるせりされと此辞共もてにをはのと、のひに至りてハ常の定まりにいさ、かもこ

となることなき物そ

で、これは古風にてにをはを説くには不十分ではあるが、結尾のまとめとしては一応の体をなしている。したがつて秘本紙背(⑦)の頭書「万葉集」の直前、

⑯「その定まれる格ハ古今集以来の歌のてにをはと全く同じこと也」〈考へ心見て知へし猶下所々に引てことわれり〉然れハ上代より「其格」おのつから定まりあること明らかし古風をよまん人もいかてかてにをはを心得ずてハ有へき其ともがらもとより是をさたすることなく心にかけてる故に「明暮」古歌をハ見れ共「格」〈「此(四字ほど不明)」此と、のへ〉あつてををしらさる也

に続く(時間的に)部分かと思われるが、この⑯は草稿本の、  
⑰右の三「ツ」〈首〉のほかハことく定まれる格の如くにていさ、かもたかへることな「し考へこゝろみて知へし」〈けれハ〉【猶下に所々引てもことわれり】「然れハ」上代よりおのつから定まりあること明らかし古風をよまん人もいかてかてにをはをたゞさずてハ有へきその輩もとより是をさたすることなく心にかけてる故に明暮古の歌をハ見れ共此と、のひあつてををしらさる也(①10ウ)

に続き(時間的に)、再稿本↓刊本と成長し、先に「三一 秘本紙

背の頭書」で述べた⑩⑪⑫⑬とともに「古風の部」総論の末尾（全集二五四頁）を構成する。

今問題とする別巻紙背の(b)⑮は、秘本紙背には相当する個所がなく、直接には草稿本の「古風の辞」冒頭、

⑮〇古風の辞

是ハ古今集よりこなたの歌にハ「耳なれ」〈見え〉ぬ辞又同じき辞も「いひさまつゝけ」〈つかひ〉さまなどの古風なる「なと」〈かきり〉を大かたにぬき出て〈たくひをわかち〉集めしるせりされと此辞共も〈すへて〉てにをはのとゝのひに至りてハつねの定まりにいさゝかも異なることなき物ぞ【古今集よりこなたにもつね見えたるさまの辞ハはふきて出さず】（19ウ）

に続き（時間的に）、秘本紙背の第一の部分へと展開していく。これ(b)はその文脈において「古風の部」に「古風の辞」を別立てとするその総論の位置を占めることになる（全集二六五頁）。

右に見てきたように(a)にしても(b)にしても、別巻紙背には、そして秘本紙背にも整った分類・見出しは未だ付けられていないし、その後、構成も変更され大幅な整理が加えられて、やがて今日見る刊本に至るが、内容としては殆ど決定稿と同様の構想があったと認められる。

四 おわりに

以上、玉緒の草稿によって、主として(1)詞辞の譬え「つたなき手して縫たらん衣の如し」に至る表現の推移(⑩⑨⑧②③)、(2)「古風のてにをは」のまとめの過程(⑮⑯⑫⑬)を問題とし、「七之巻」の構成について述べた。

詞の玉緒「七之巻」の成立過程は、初めに、証歌となるべき歌が不十分ながら用意されていて、当然のことながら係りと結びの一般法則が構想の中であって、この二つによって係りのてにをはに傾斜しながら書き始めた。その時点での全体構成は簡単なものであったが(別巻紙背)、稿を重ねるとともに証歌を確かにし、構成を整え、古風の係りの助詞の部分が詳細精密になって今日見る姿になった。

玉緒の現在知られている草稿のうち、別巻紙背と秘本紙背が初期の草稿であることは述べてきたところによって疑う余地がない。かつ別巻紙背と秘本紙背とは、その後の、例えば草稿本以降の構成に照合して一方が他の一方の欠落部分を補う相互補完の関係にある二つの草稿と認められ、そして全体の構成を具体的に支えるのは証歌の証例であり、それは別巻紙背と秘本紙背の前におそらく位置する、多量の証歌の抜き書き集「詞の玉緒草稿下書」<sup>3)</sup>である。

「詞の玉緒草稿下書」の後、別巻紙背・秘本紙背↓草稿本↓再稿本↓刊本の順に成ったのは言うまでもない。うち、別巻紙背は紙背

「玉くしげ別巻草稿本草稿」の関係で一括されてはいるが、前半と後半とで執筆の時期が異なり前半は最も初めの草稿と考えられる。

他に、別巻紙背・秘本紙背の内部が幾つかに分かれるそれぞれの検討、別巻紙背・秘本紙背から草稿本に至る過程、各草稿における丁の表・裏を示す「ヲ、ウ」の有無、一応整った草稿本にしても内部二系列論<sup>4</sup>もあってすべてが一時期連続して執筆されたとするには疑問があることを別巻紙背・秘本紙背の側から検討すること等々、述べるべき多くを残しているが、今は別の機会を俟つ。(了)

#### 注

1 時枝誠記『日本文法 口語篇』五四頁

一九九二年二月 第一七刷 岩波書店

2 渡辺英二「玉緒草稿―玉椿稿紙背と仮字の林稿紙背―」

『上越教育大学 国語研究』第10号 平成八年二月

上越教育大学国語教育学会

3 (1)本居宣長記念館研究室『本居宣長記念館所蔵 重要文化財

目録―書誌・略解題―』一一三。 ↓注2。

(2)「詞の玉緒草稿下書」は、右の『重要文化財目録』の解題によれば第一冊、第二冊、第三冊、第十四冊の三部に分かれ、うち「七之巻」に關係するのは、その第二冊をまとめて収める

袋に本居清造筆で、

詞の玉緒稿 拾五葉、同 半紙書 五葉、

板本「詞の玉緒」の正誤 一葉

とある第二の、その第一葉に「万葉の格」とある「同 半紙書五葉」である。「草稿下書」中、上代関係の歌はこれのみで、その歌数は中古及びそれ以降の歌数に比べて極めて少なく、この資料のみでは七之巻の証歌を導くことは出来ない。「草稿下書」と「玉緒」の關係の詳細な調査が未了の今、確言はできないが、他に上代關係の資料が存在した(する)と思われる。

4 (1)小泉道子「詞の玉緒」草稿本の研究

平成七年度修了 上越教育大学大学院 修士論文

(2)小泉道子「詞の玉緒」草稿本について

『上越教育大学 国語教育』第12号 平成一〇年二月

上越教育大学国語教育学会

(一九九九・一・七)